ダンス創作過程のデモンストレーション化の試みとその評価：平成28年度「第52回ダンス研究発表会」での実践を通して

Attempt and Effects of Demonstration of the Dance Creation Process: Through the52nd Dance Study Performance (2016)

キーワード：創作ダンス、舞踊教育、発表

長谷川　千里　　大迫　菜緒*　　髙橋　美砂*
田神　春香**　　大竹　佑佳***
HASEGAWA Chisato　OSAKO Nao　TAKAHASHI Misa
TAGAMI Haruka　OTAKE Yuka
（*日本女子体育大学大学院、**東京女子体育大学教務補佐、***女子栄養大学非常勤助手）

Ⅰ　緒言

本学ダンス部は、ダンス作品を創作するにあたり、伊澤エイの基本運動を基軸に、バレエ、モダンダンス、コンテンポラリーダンス、ストリートダンス等、様々なジャンルのダンスに取り組んでいる。今年度は、日々の練習に加え、技術向上や作品創作へのヒントを得るため、ワークショップへ参加した。その成果の一つとして、「第28回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）」において特別賞を受賞することができたと考える。ワークショップで行った内容は、即興的な表現を引き出す方法や、自身の身体に向き合うような内容であったと学生から報告を受けた。このワークショップで得た内容を発表会の舞台で活かすことができないかと考え、ダンス創作過程のデモンストレーション化の試みが始まった。

ダンス作品は、創作過程を経て、作品を構築し、発表される。創作過程は、発表に向けた過程に過ぎず、披露されることはない。しかし、その創作過程は様々な道筋をたどり、そこにダンスの面白さが内在していると考える。

ダンスの創作方法について、学校教育現場での指導事例は専門家によって書籍や講習会等で数多く紹介され、現場で活用されている。また、日本内外で活躍するダンサー、振付家から動きを生み出す方法、創作方法を学ぶ機会も数多く存在する。講習会等では、学んだ内容を共有する目的で、舞台上でその内容の一部を紹介するような場を設けている場合もある。しかし、今回の取り組みのように、ダンスを専門とした教育者、指導者を目指し、部活に所属する学生自身が日々の取り組みである創作過程を舞台上で提示する試みは見られない。

そこで、本研究は今年度の「第52回ダンス研究発表会」における「創作過程」そのものを舞台上で提示（デモンストレーション化）の取り組みを報告するとともに、それに関わる学生の意識調査により、取り組みの成果を検証することを目的とする。

Ⅱ　方法

1．ダンス作品の創作過程を舞台上で提示する試み

平成28年度第52回ダンス研究発表会では、「ワークショップ・デモンストレーション」（以下、W.D.と略）

と称して、動きが生み出される過程、作品へと仕上げていく過程を提示することとした。その内容をⅢ結果にて解説していく。この内容をまとめるため、各パートを取りまとめたダンス部4年生への聞き取り調査、及び筆者らの指導実践を参考とした。

出演者はダンス部学生48名であり、その内訳は1年15名（体育学部11名、保健体育学科1名、児童教育学科3名）、2年13名（体育学部9名、児童教育学科4名）、3年14名、4年6名であった。

2．デモンストレーション化に対する出演者の評価

1）対象（Ⅱ方法1．1）の通り）

2）調査日

調査日は平成28年11月5日～21日である。

3）調査内容

調査内容はデモンストレーション化の取り組みに関する11項目、今後の部活動への影響に関する6項目、教育現場での有用性に関する3項目である。

4）分析方法

分析は、単純集計（記述式回答はカテゴリー化）後、学年別にクロス集計し、χ二乗検定、残差分析をおこなった。また、項目によってはT検定をおこなった。有意水準は$p<0.05$未満とした。

5）倫理的配慮

口頭、及び紙面にて研究目的及び方法、調査の任意性、個人情報の保護等について説明し、同意を得た上で調査をおこなった。

Ⅲ　結果

1．ダンス作品の創作過程を舞台上で提示する試み

W.D.では、1）「ひと流れの動き」を刺激とした取り組み、2）「物」を刺激とした取り組み、3）「日常の動き」を刺激とした取り組みの3部構成でおこなった。それぞれの刺激を起点とした創作過程を段階をおって提示し、最終的に習作として作品を発表した。創作過程の段階が明確となるようファシリテーターを置き、解説しながら進行をおこなった。

音楽は、創作過程では動きを生み出す補助的な役割を果たす意味でBGM的に使用し、習作では作品のテーマに合わせた選曲をおこなった。衣装は、創作過程では普段の練習着に近いレオタードやTシャツ、ズボン等を着用し、習作では作品のテーマに合わせた衣装を着用した。照明は、創作過程ではダンサーの動きを見せるためだけの地明かりを基本とし、習作ではテーマに合わせて照明の変化をおこなった。

1）「ひと流れの動き」を刺激とした取り組み

＜創作過程1段階＞「ひと流れの動き」の解説

創作過程1段階では、まず、感じや感情表現を含まない12個の動きを組み合わせて、流れのある動きの連なりを創作し、「ひと流れの動き」とした。一つ一つの動きを解説し、その後、カウントをつけて流れの中で動いた。

＜創作過程2段階＞感じを込めて動く

次に、創作過程1段階で示した「ひと流れの動き」の冒頭部分にある二つの動きを、次の①～④の具体的なイメージを持って動いた。イメージを持つことで、動きがどのように変化するかを検証する試みである。

①朝、カーテンを開けるような感じ

明るく軽やかで、期待に満ちたさわやかな動きへと変化する様子がみられた。

②黒板をひっかく感じ

力強く鋭い動きとともに、身を縮め、逃げ出したくなるような表現へと変化する様子がみられた。

③水中で動いている感じ

重力を感じさせないゆったりとした動きに変化するとともに、動きに緩急が加わる様子がみられた。

④壁に落書きをしている感じ

明るくリズミカルでダイナミックな動き、表現へと変化していく様子がみられた。

以上の①～④は感情表現を含まない「ひと流れの動き」をイメージを持って動く試みであったが、イメージによって動きの質感が変化し、表現へとつながっていくことが提示できたのではないかと考える。

＜創作過程3段階＞心情を描写する

創作過程2段階で提示した感じを込めて動く試みから、より作品に近づけるために、動きを感情表現へと発展させることを試みた。創作過程3段階では、「ひと流れの動き」を「逆鱗に触れる」という感情で動き、感情表現へと発展していった。

「逆鱗に触れる」という感情には、怒り、憤り、非難

等の感情が含まれ、これらの感情を持って動くことで、激しく強い動きへと変化した。この感情の中には、怯え、恐怖、不条理さ等、弱く繊細な感情も感じられることから、強い表現と対極の弱い表現を加えることで感情が際立ったのではないかと考える。また、個や群の空間構成を用いることで感情が強調され、より作品へと近づいたことが提示できたのではないかと考える。

＜習作＞「ひと流れの動き」を作品化へ

「ひと流れの動き」を刺激とした取り組みの最終段階は、習作として作品を発表する試みである。創作過程1～3段階での変化や展開を踏まえ、中原中也の詩『冷たい夜』をテーマに、作品を創作し、発表をおこなった。

中原中也の詩から、冬の凍えるような風景の中で主人公の心が冷たく、沈んでゆく様子を読み取り、作品の中核となるテーマを「孤独」とし、「ひと流れの動き」を発展させていった。「ひと流れの動き」を「孤独」のイメージを持って動きながらも、詩の世界から触発され、新たに生まれた動きも交えながら創作をおこなった。詩の中では、「心が錆びて紫色になる」、「棉の実が罅裂ける」、「薪が燻っている」等、心情に切り込むような表現や冬の情景を美しく描写する表現などが随所にみられたため、イメージが広がり、動きを生み出す手だてとなった。また、空間構成や選曲、衣装等を工夫することにより、「ひと流れの動き」を一つの作品として提示することができたのではないかと考える。

2)「物」を刺激とした取り組み

「物」を刺激とした取り組みでは、今回は椅子を用いた取り組みを紹介した。

＜創作過程1段階＞

創作過程1段階では、椅子の数や向き、また、それに関わる人数を①～⑥のように変化させることで、どのように動きに変化が生まれるかを提示することを試みた。

①椅子取りゲーム

椅子取りゲームの際に見られる日常的な言葉がけや動作から、姿勢や表情が様々に変化していった。また、スピード感溢れる動きが生み出された。

②一脚の椅子に二人

椅子を取り合っている二人という関係性が生まれ、多様な動きが生み出された。

③一脚の椅子に大勢

②同様に椅子を取り合っている二人という関係性が生まれるとともに、個対群の関係性やカノン等、群の構成変化につながる動きが生み出された。

④二脚の背中合わせの椅子に二人

知らない者同士という関係性が生まれ、その相手への嫌悪感、興味や好奇心、齟齬などが動きとなり、多様な動きが生み出された。

⑤二脚の隣り合わせの椅子に二人

仲の良い友達同士という関係性が生まれ、多様な動きが生み出された。

⑥十脚の椅子に十人

一体感や団結した関係性が生まれ、群の変化につながる動きが生み出された。

以上の①～⑥では、椅子の数や向き、それに関わる人数の変化により、関係性や動きの変化を模索する試みであったが、それぞれに異なる動きが生まれ、多様な動きへ発展できること、群の構成変化へとつながることが提示できたのではないかと考える。

＜習作＞「物」を使って作品化へ

「物」を刺激とした取り組みの最終段階は、習作として作品を発表する試みである。創作過程1段階での多様な動きを活かして、二脚の椅子に二人という設定で、椅子の配置を工夫し、そこにみられる人間関係を描写していった。イメージを深めていく中で、学生自身の抱える問題「自信の持てない若者」に焦点をあて、創作していった。煌びやかな世界に憧れ、スポットライトを浴びたい、誰かに認められたいといった感情や、自信の持てない様子、一歩が踏み出せない様子を表現するため、「ディスコへの憧憬」を作品の中核となるテーマとして、椅子を使って表現することとした。そこで、タイトルを「ディスコにいこう」とし、空間構成や選曲、衣装等を工夫し、作品を創作し、発表をおこなった。

若者の葛藤ややりきれなさ、欲求不満、やり場のない不安や怒りなどの感情から、様々な動きが生み出された。また、テーマを深め、イメージを広げなが

ら椅子の配置や向きを変化させることによって、様々な場面に見立てることができ、多様な動きへと発展していった。たとえば、横並びに置いた椅子を公園のベンチに見立てて、葛藤する若者を表現したり、ディスコに見立てた椅子の上で踊ることで、ディスコに行った気になって我を忘れて踊る若者を表現したりと、様々な表現へつながっていった。その他、多様な椅子の使い方も提示できたのではないかと考える。このように「物」を使って一つの作品として提示することができたのではないかと考える。

3)「日常の動き」を刺激とした取り組み

3部構成の3つ目として、「日常の動き」を刺激として、その創作過程と作品化への取り組みを舞台上で提示することを試みた。今回は喜多川歌麿の浮世絵『品川の月』を題材とした。この作品は室内を描いており、室内の段差や遠近感をできる限り忠実に舞台上で再現したいと考え、舞台装置として台（高さ20～30cm）を舞台上に設置した。

＜創作過程1段階＞

創作過程1段階では、作品に描かれている人物の模写をおこなった。この喜多川歌麿『品川の月』の中には20名の人物が描かれているが、動作が判別しがたい人物を除く15名を対象とした。

＜創作過程2段階＞

創作過程2段階では、作品の人物たちの様子から、何をしているところなのかを想像し、日常的な会話と動きを考えて動いてみた。

手紙を読みながら会話をする様子、三味線の稽古をする様子、お碗を運ぶ女性と立ち話をする様子、熱心に月を眺めて故郷に思いを馳せる様子、行灯に火をともす様子、部屋の中を駆け巡る子供の様子など、作品の人物が動き出したかのような、日常的な会話と仕草が提示できたのではないかと考える。

＜創作過程3段階＞

次に、創作過程2段階で生まれた仕草や動きを、会話のイメージをもとに、仕草や動きを強調したり、リズムの中で動くことで、ダンス的な動きへと変化させていった。創作過程2段階で生まれた日常的な仕草や動きが大きくなり、空間が広がることが提示できたのではないかと考える。

＜創作過程4段階＞

さらに、創作過程3段階で生まれたダンス的な動きをもとに、会話のイメージから、一番表したい動きを集めて繋げていき、グループごとのユニゾンを考えた。グループの特徴が明確になることが提示できたのではないかと考える。

＜創作過程5段階＞

創作過程5段階では、『品川の月』の作品全体の雰囲気を捉え、それを表せるような動きを創作過程第4段階で生まれた動きから厳選し、それらを繋げて、全体がユニゾンで動けるような流れを考えた。全体がユニゾンで動くことで、作品全体の特徴が明確となり、作品としてのまとまりが提示できたのではないかと考える。

＜習作＞「日常の動き」を作品化へ

「日常の動き」を刺激とした取り組みの最終段階は、習作として作品を発表する試みである。創作過程1～5段階での変化や展開を踏まえ、『品川の月』に学生独自のイメージを重ね、空間構成や選曲、衣装等を工夫し、作品を創作し、発表をおこなった。

満月の夜と品川の海は今も、喜多川歌麿のいた時代と変わらず存在しており、時の流れに伴い、風景やそこに暮らす人々は変化していったが、変わらないものがあるという「感動」と、昔と変わらず、満月を眺めて様々な思いを馳せる「日本人の情緒」を作品の中核となるテーマとして、創作過程1～5段階で生まれた動きを踏まえて創作した。満月の夜に打ち寄せる波の様子や、満月を見上げる女性の後姿によって、凛とした日本の女性を表現した。ユニゾンでは満月の明るさ、妖艶さを躍動的で流麗な動きで表現した。このように、「日常の動き」を刺激として動きを生み出し、表現へとつなげていくことで、より多彩な表現へと発展し、一つの作品を提示することができたのではないかと考える。

2. デモンストレーション化に対する出演者の評価

1)「ワークショップ・デモンストレーション」への理解度と取り組みに対する自己評価（学年別）

①理解度と学年（表1－1）

W.D.に対する理解度は、全体では、「1全体を理解していた」21名（43.8%）、「2ある程度は全体を理解

していた」22名（45.8%）、「3関わったパートは理解していた」5名（10.4%）、「4踊った部分だけは理解していた」、「5理解できなかった」0名（0.0%）であった。

χ^2検定の結果、5%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は4年の調整済み残差値2.969と1%水準で有意に高かった。「2」は4年の調整済み残差値−2.409と5%水準で有意に低かった。「3」〜「5」では有意差はみられなかった。

②内容を理解した時期と学年（表1−2）

W.D.の内容を理解した時期については、全体では、「1企画期」6名（12.5%）、「2創作活動初期」6名（12.5%）、「3創作活動中期」18名（37.5%）、「4創作活動後期」17名（35.4%）、「5仕上げ期」1名（2.1%）、「6発表期」、「7理解できなかった」0名（0.0%）であった。

χ^2検定の結果、1%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は4年の調整済み残差値6.928と1%水準で有意に高かった。「3」は4年の調整済み残差値−2.028と5%水準で有意に低かった。「2」〜「7」では有意差はみられなかった。

③興味関心度の事前・事後の変化（図1−1、図1−2）

W.D.の取り組みにおける興味・関心度の前後比較をおこなうため、興味・関心度を「1大変あり」3点、「2ややあり」2点、「3あまりなし」1点、「4全くなし」0点に得点化し、T検定をおこなった。その結果、全体では、事前の平均2.33点、事後の平均2.75点であり、1%水準で有意差がみられた。

学年別では、1年生は、事前の平均2.13点、事後の平均2.60点であり、5%水準で有意差がみられた。2年生は、事前の平均2.54点、事後の平均2.85点であり、有意差はみられなかった。3年生は、事前の平均2.07点、事後の平均2.71点であり、1%水準で有意差がみられた。4年生は、事前、事後の平均がともに3.00点（満点）であった。

④動きづくりへの取り組み姿勢と学年（表1−3）

関わったパートにおける創作活動において、動き（振付）を生み出すことに対しての自己評価は、全体では、「1積極的に関わった」25名（52.1%）、「2やや関わった」10名（20.8%）、「3あまり関われなかった」13名（27.1%）、「4全く関われなかった」0名

表1−1：ワークショップ・デモンストレーションに対する理解度

		全体(n=48)	1年(n=15)	2年(n=13)	3年(n=14)	4年(n=6)	χ^2検定
		度数(%)					
理解度	全体を通して理解していた	21 (43.8)	4 (26.7)	7 (53.8)	4 (28.6)	6 (100.0)**	p<0.05
	ある程度は全体を理解していた	22 (45.8)	10 (66.7)	4 (30.8)	8 (57.1)	0 (0.0)*	
	関わったパートは理解していた	5 (10.4)	1 (6.7)	2 (15.4)	2 (14.3)	0 (0.0)	
	踊った部分だけは理解していた	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	理解できなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

*残差分析にて調整済み残差 p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差 p<0.01

表1−2：ワークショップ・デモンストレーションの内容をいつごろ理解したか

		全体(n=48)	1年(n=15)	2年(n=13)	3年(n=14)	4年(n=6)	χ^2検定
		度数(%)					
理解度	企画期	6 (12.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)**	p<0.01
	創作活動初期	6 (12.5)	3 (20.0)	1 (7.7)	2 (14.3)	0 (0.0)	
	創作活動中期	18 (37.5)	3 (26.7)	7 (53.8)	7 (50.0)	0 (0.0)*	
	創作活動後期	17 (35.4)	7 (46.7)	5 (38.5)	5 (35.7)	0 (0.0)	
	仕上げ期	1 (2.1)	1 (6.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	発表期	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	理解できない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

*残差分析にて調整済み残差 p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差 p<0.01

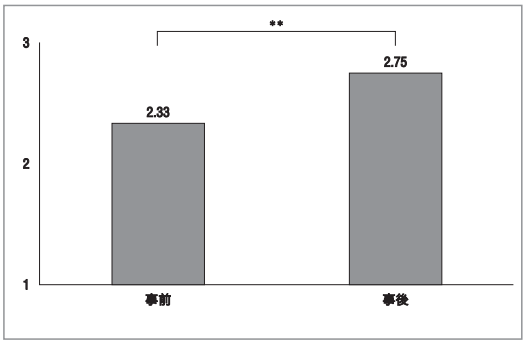

図1－1：ワークショップ・デモンストレーションに対する事前、事後の興味・関心度の変化

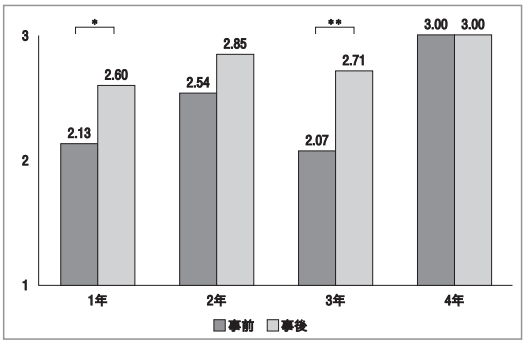

図1－2：ワークショップ・デモンストレーションに対する事前、事後の興味・関心度の変化（学年別）

表1－3：動きづくり（振付）への取り組み姿勢

		全体（n=48）	1年（n=15）	2年（n=13）	3年（n=14）	4年（n=6）	χ^2検定
		度数（%）					
振付への取り組み	積極的に関わった	25（52.1）	2（13.3）**	7（53.8）	11（78.6）*	5（83.3）	p<0.01
	やや関わった	10（20.8）	3（20.0）	5（38.5）	2（14.3）	0（0.0）	
	あまり関われなかった	13（27.1）	10（66.7）**	1（7.7）	1（7.1）*	1（16.7）	
	全く関われなかった	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	

*残差分析にて調整済み残差 p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差 p<0.01

表1－4：構成への取り組み姿勢

		全体（n=48）	1年（n=15）	2年（n=13）	3年（n=14）	4年（n=6）	χ^2検定
		度数（%）					
構成への取り組み	積極的に関わった	15（31.3）	1（6.7）*	0（0.0）**	9（64.3）**	5（83.3）**	p<0.01
	やや関わった	14（29.2）	2（13.3）	7（53.8）*	5（35.7）	0（0.0）	
	あまり関われなかった	17（35.4）	11（73.3）**	5（38.5）	0（0.0）**	1（16.7）	
	全く関われなかった	2（4.2）	1（6.7）	1（7.7）	0（0.0）	0（0.0）	

*残差分析にて調整済み残差 p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差 p<0.01

（0.0%）であった。

χ^2検定の結果、1%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は1年の調整済み残差値－3.623と1%水準で有意に低かった。一方、3年の調整済み残差値2.357と5%水準で有意に高かった。「3」は1年の調整済み残差値4.161と1%水準で有意に高かった。一方、3年の調整済み残差値－1.995と5%水準で有意に低かった。「2」、「4」では有意差はみられなかった。

⑤構成への取り組み姿勢と学年（表1－4）

関わったパートにおける創作活動において、場面構成、作品構成をすることに対しての自己評価は、全体では、「1積極的に関わった」15名（31.3%）、「2やや関わった」14名（29.2%）、「3あまり関われなかった」17名（35.4%）、「4全く関われなかった」2名（4.2%）であった。

χ^2検定の結果、1%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は1年の調整済み残差値－2.477と5%水準、2年の調整済み残差値－2.847と1%水準で有意に低かった。一方、3年の調整済み残差値3.169と1%水準、4年の調整済み残差値2.942と1%水準で有意高かった。「2」は2年の調整済み残差値2.293と5%水準で有意に高かった。「3」は1年の調整済み残差値3.703と1%水準で有

意に高かった。一方、3年の調整済み残差値－3.292と1%水準で有意に低かった。「4」では有意差はみられなかった。

⑥振付の採用度と学年（表1－5）

関わったパートにおける創作活動において、自身が生み出した振付の採用度に対しての自己評価は、全体では、「1大変多く採用された」13名（27.1%）、「2やや採用された」18名（37.5%）、「3あまり採用されなかった」13名（27.1%）、「4全く採用されなかった」4名（8.3%）であった。

χ^2検定の結果、1%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は1年の調整済み残差値－2.847と1%水準で有意に低かった。一方、4年の調整済み残差値2.332と5%水準で有意に高かった。「2」は2年の調整済み残差値2.097と5%水準で有意に高かった。一方、4年の調整済み残差値－2.028と5%水準で有意に低かった。「3」では有意差はみられなかった。「4」は1年の調整済み残差値3.098と1%水準で有意に高かった。

⑦苦労した点（表1－6、図1－3、図1－4）

W.D.への取り組みにおいて苦労した点を自由記述にて調査し、カテゴリー化をおこなった。「1内容を固めること」、「2観客への見せ方」、「3構成」、「4動きづくり」、「5踊り方」、「6他学年との関わり」、「7練習面」、「8その他」、「9特になし」の9項目に分類し、学年とのクロス集計をおこなった。その結果、全体では、「4」26名（54.2%）、「5」11名（22.9%）、「2」10名（20.8%）の順に多くの回答を得た。

χ^2検定の結果、5%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は4年の調整済み残差値5.166と1%水準で有意に高かった。「5」は1年の調整済み残差値1.974と5%水準で有意に高かった。その他の項目では有意差はみられなかった。

具体的な記述内容は、「1」では「まとめることに苦労した」、「他パートとの兼ね合いを考慮しながらまとめることが難しかった」等であった。「2」では「過程を舞台上で提示するため、見せる前提で考えるのが大変だった」、「観客に理解できるように創るのが難しかった」、「どんな動きが観客にとって面白いかを考えるのが難しかった」等であった。「4」では「道具が限定されることが難しかった」、「ひと流れの動きのベースを、どこまで崩すかを悩んだ」、「動きを考える

表1－5：振付の採用度

		全体(n=48)	1年(n=15)	2年(n=13)	3年(n=14)	4年(n=6)	χ^2検定
		度数(%)					
振付採用度	大変多く採用された	13 (27.1)	0 (0.0)**	3 (23.1)	6 (42.9)	4 (66.7)*	p<0.01
	やや採用された	18 (37.5)	5 (33.3)	8 (61.5)*	5 (35.7)	0 (0.0)*	
	あまり採用されなかった	13 (27.1)	6 (40.0)	2 (15.4)	3 (21.4)	2 (33.3)	
	全く採用されなかった	4 (8.3)	4 (26.7)**	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

*残差分析にて調整済み残差 p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差 p<0.01

表1－6：苦労した点

		全体(n=48)	1年(n=15)	2年(n=13)	3年(n=14)	4年(n=6)	χ^2検定
		度数(%)					
振付採用度	内容を固めること	6 (12.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)**	p<0.05
	観客への見せ方	10 (20.8)	1 (6.7)	4 (30.8)	3 (21.4)	2 (33.3)	
	構成	5 (10.4)	2 (13.3)	0 (0.0)	2 (14.3)	1 (16.7)	
	動きづくり	26 (54.2)	8 (53.3)	6 (46.2)	10 (71.4)	2 (33.3)	
	踊り方	11 (22.9)	6 (40.0)*	3 (23.1)	1 (7.1)	1 (16.7)	
	他学年との難しさ	4 (8.3)	2 (13.3)	0 (0.0)	1 (7.1)	1 (16.7)	
	練習面	4 (8.3)	1 (6.7)	2 (15.4)	1 (7.1)	0 (0.0)	
	その他	3 (6.3)	1 (6.7)	1 (7.7)	0 (0.0)	1 (16.7)	
	特になし	2 (4.2)	0 (0.0)	1 (7.7)	1 (7.1)	0 (0.0)	

*残差分析にて調整済み残差 p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差 p<0.01

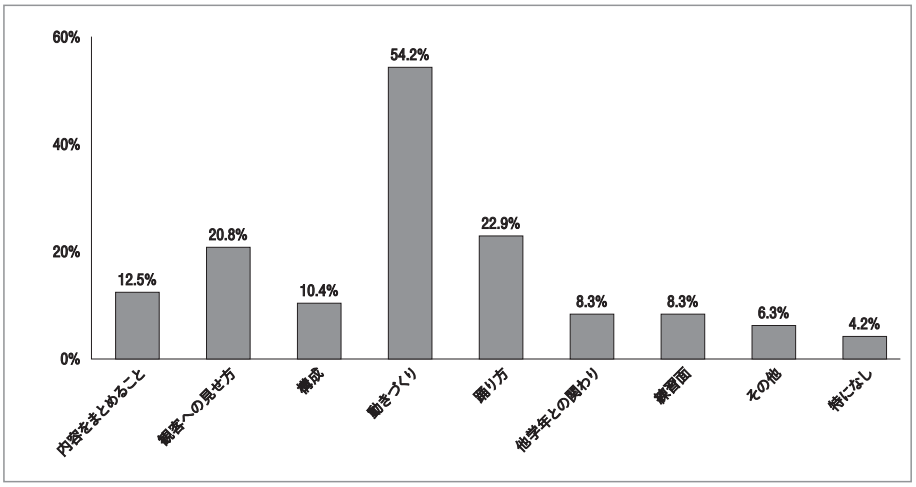

図1－3：苦労した点

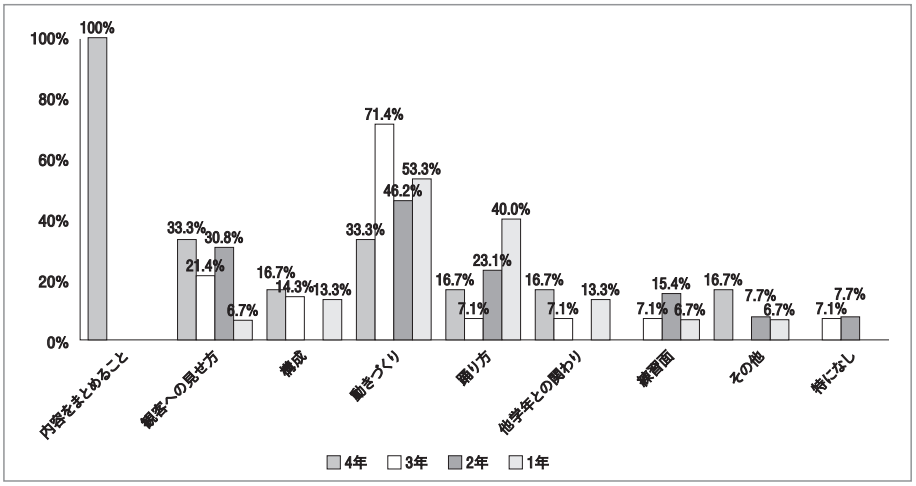

図1－4：苦労した点（学年別）

ことが難しかった」等であった。「5」では「イメージを持って動くことが難しかった」、「動きの合わせが大変だった」等であった。

⑧新たな発見や気づき（表1－7、図1－5、図1－6）

W.D.への取り組みにおける新たな発見や気づきを自由記述にて調査し、カテゴリー化をおこなった。「1創作に対するヒントを得た」、「2表現の面白さ」、「3見え方に対する発見」、「4新しい動きの発見」、「5身体への気づき」、「6教育的気づき」、「7上級生からの学び」、「8その他」、「9特になし」の9項目に分類し、学年とのクロス集計をおこなった。その結果、全体では、「1」19名（40.4%）、「4」11名（23.4%）、「3」6名（12.8%）の順に多くの回答を得た。

χ^2検定の結果、5%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「2」は4年の調整済み残差値2.290と5%水準で有意に高かった。「6」は4年の調整済み残差値3.498と1%水準で有意に高かった。その他の項目では有意差はみられなかった。

具体的な記述内容は、「1」では「アレンジを加えることで、作風を変化させられることが発見できた」、「手

表1－7：新たな発見や気付き

		全体(n=48)	1年(n=15)	2年(n=13)	3年(n=14)	4年(n=6)	χ^2検定
		度数(%)					
振付採用度	創作に対するヒントを得た	19 (39.6)	6 (40.0)	5 (38.5)	7 (50.0)	1 (16.7)	p<0.05
	表現の面白さ	2 (4.2)	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	1 (16.7)*	
	見え方に対する発見	7 (14.6)	4 (26.7)	3 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	新しい動きの発見	11 (22.9)	1 (6.7)	6 (46.2)	4 (28.6)	0 (0.0)	
	身体への気付き	4 (8.3)	0 (0.0)	1 (7.7)	2 (14.3)	1 (16.7)	
	教育的気付き	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (16.7)**	
	上級生からの学び	1 (2.1)	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	その他	3 (6.3)	0 (0.0)	1 (7.7)	2 (14.3)	0 (0.0)	
	特になし	4 (8.3)	3 (20.0)*	0 (0.0)	1 (7.1)	0 (0.0)	

*残差分析にて調整済み残差　p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差　p<0.01

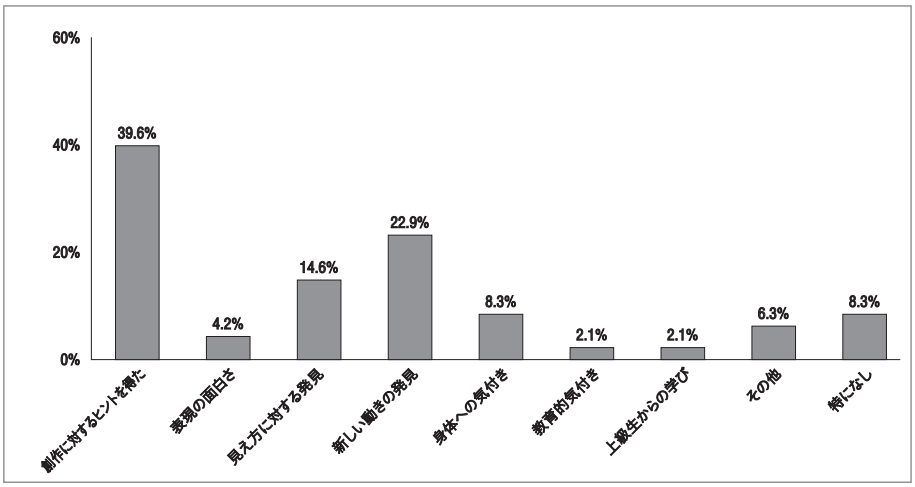

図1－5：新たな発見や気付き

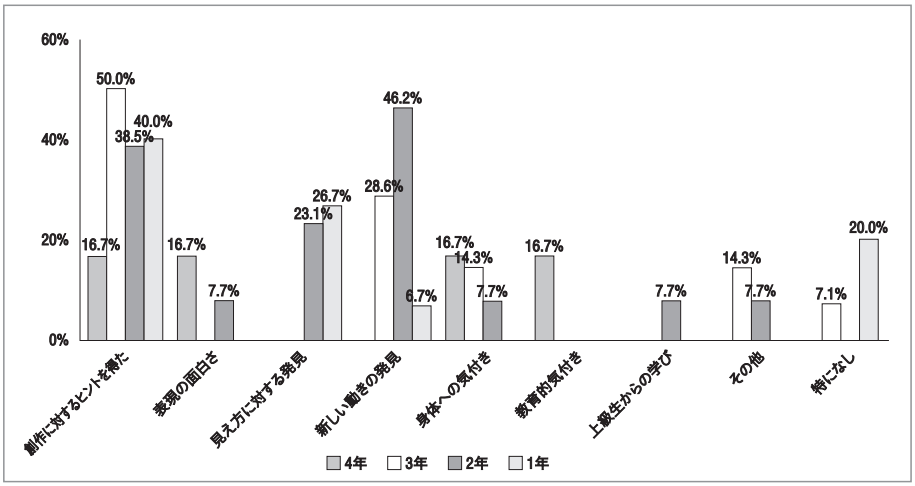

図1－6：新たな発見や気付き(学年別)

法や視点の変化により、面白い動きが作れることが発見できた」、「全てがダンスに繋がることが分かった」等であった。「2」では「表現の自由さを感じた」等であった。「3」では「イメージの違いで見え方が変わることが分かった」、「足先、指先を変えるだけで動きが異なって見えることに気付いた」等であった。「4」では「新たな動きを発見出来てよかった」、「イメージを振りに発展させることが発見できた」等であった。「6」では「ダンスの題材として、他教科と関連が図れると感じた」であった。

2) 今後の部活動への影響（学年別）

本項目では、引退した4年生（6名）、及び短期大学2年生（2名）を除く、40名が対象者である。

①創作活動への活用の可能性と学年（表2－1）

W.D.での取り組みが今後の部活動における創作活動に活用可能であるかという質問では、全体では、「1おおいに活かせる」31名（77.5%）、「2やや活かせる」9名（22.5%）、「あまり活かせない」、「全く活かせない」0名（0.0%）であった。χ^2検定の結果、有意差はみられなかった。

②部活動に対する意欲と学年（表2－2）

W.D.での取り組みが今後の部活動への意欲に影響するかを調査するため、この項目では、部活動への意欲を「以前から意欲的」な群（以下、意欲有群）36名（90.0%）と「以前はやや意欲的でない」群（以下、意欲不足群）4名（10.0%）に分け、それぞれを学年ごとにクロス集計した。その結果、意欲有群の全体は、「1さらに高まった」15名（41.7%）、「2やや高まった」19名（52.8%）、「3あまり高まらなかった」2名（5.6%）、「4全く高まらなかった」0名（0.0%）であった。意欲不足群は4名のみのため割愛する。χ^2検定の結果、有意な差はみられなかった。

③創作ダンスへの関心と学年（表2－3）

W.D.での取り組みが創作ダンスへの関心度に影響するかを調査するため、この項目では、創作ダンスへの関心を「以前から関心がある」群（以下、関心有群）36名（90.0%）と「以前はやや関心のない」群（以下、関心不足群）4名（10.0%）に分け、それぞれを学年ごとにクロス集計した。その結果、関心有群の全体は、「1さらに高まった」22名（41.1%）、「2

表2－1：創作活動への活用の可能性

		全体(n=40)	1年(n=15)	2年(n=11)	3年(n=14)	χ^2検定
		度数(%)				
理解度	おおいに活かせる	31 (77.5)	10 (66.7)	11 (100.0)	10 (71.4)	n.s.
	やや活かせる	9 (22.5)	5 (33.3)	0 (0.0)	4 (28.6)	p=0.1054
	あまり活かせない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	全く活かせない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

表2－2：部活動に対する意欲

		全体(n=36)	1年(n=12)	2年(n=11)	3年(n=13)	χ^2検定
		度数(%)				
以前から意欲的	大変、高まった	15 (41.7)	4 (33.3)	7 (63.6)	4 (30.8)	n.s.
	やや高まった	19 (52.8)	7 (58.3)	4 (36.4)	8 (61.5)	p=0.4703
	あまり高まらなかった	2 (5.6)	1 (8.3)	0 (0.0)	1 (7.7)	
	全く高まらなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

		全体(n=4)	1年(n=3)	2年(n=0)	3年(n=1)	χ^2検定
		度数(%)				
やや意欲的でない	大変、高まった	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	n.s.
	やや高まった	2 (50.0)	2 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	p=0.1353
	あまり高まらなかった	1 (25.0)	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	全く高まらなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

やや高まった」13名（36.1%）、「3あまり高まらなかった」名（2.8%）、「4全く高まらなかった」0名（0.0%）であった。意欲不足群は4名のみのため割愛する。χ^2検定の結果、有意差はみられなかった。

④創作過程の面白さと学年（表2－4）

W.D.に取り組んだことで創作過程にも面白さを感じたかという質問では、全体では、「1大変、面白いと感じる」27名（67.5%）、「2やや面白いと感じる」12名（30.0%）、「あまり面白いと感じない」1名（2.5%）、「全く面白いと感じない」0名（0.0%）であった。χ^2検定の結果、有意差はみられなかった。

⑤挑戦したいことと学年（表2－5、図2－1、図2－2）

今後、作品創作、発表をおこなう中で挑戦してみたいことを自由記述にて調査し、カテゴリー化をおこ

表2－3：創作ダンスへの関心

		全体(n=36)	1年(n=11)	2年(n=11)	3年(n=14)	χ^2検定
		度数(%)				
以前から関心あり	大変、高まった	22（61.1）	7（63.6）	9（81.8）	6（42.9）	n.s.
	やや高まった	13（36.1）	4（36.4）	2（18.2）	7（50.0）	p=0.3035
	あまり高まらなかった	1（2.8）	0（0.0）	0（0.0）	1（7.1）	
	全く高まらなかった	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	

		全体(n=4)	1年(n=4)	2年(n=0)	3年(n=0)
		度数(%)			
あまり関心ない	大変、高まった	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）
	やや高まった	3（75.0）	3（75.0）	0（0.0）	0（0.0）
	あまり高まらなかった	1（25.0）	1（25.0）	0（0.0）	0（0.0）
	全く高まらなかった	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）

※学年が１年生のみのため分析不可

表2－4：創作過程の面白さ

		全体(n=40)	1年(n=15)	2年(n=11)	3年(n=14)	χ^2検定
		度数(%)				
理解度	大変、面白いと感じる	27（67.5）	9（60.0）	8（72.7）	10（71.4）	n.s.
	やや面白いと感じる	12（30.0）	5（33.3）	3（27.3）	4（28.6）	p=0.7430
	あまり面白いと感じない	1（2.5）	1（6.7）	0（0.0）	0（0.0）	
	全く面白いと感じない	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	

表2－5：部活動において挑戦したいこと

		全体(n=40)	1年(n=15)	2年(n=11)	3年(n=14)	χ^2検定
		度数(%)				
振付採用度	作品づくり	11（27.5）	5（33.3）	3（27.3）	3（21.4）	n.s.
	表現	4（10.0）	0（0.0）	0（0.0）	4（28.6）	p=0.3285
	構成づくり	1（2.5）	0（0.0）	0（0.0）	1（7.1）	
	動きづくり	13（32.5）	3（20.0）	4（36.4）	6（42.9）	
	独創的な発想	1（2.5）	0（0.0）	0（0.0）	1（7.1）	
	新たなジャンル	2（5.0）	1（6.7）	0（0.0）	1（7.1）	
	技術向上	6（15.0）	4（26.7）	2（18.2）	0（0.0）	
	大会への挑戦	1（2.5）	0（0.0）	1（9.1）	0（0.0）	
	他パートへの挑戦	2（5.0）	1（6.7）	1（9.1）	0（0.0）	
	その他	3（7.5）	2（13.3）	0（0.0）	1（7.1）	
	特になし	4（10.0）	2（13.3）	1（9.1）	1（7.1）	

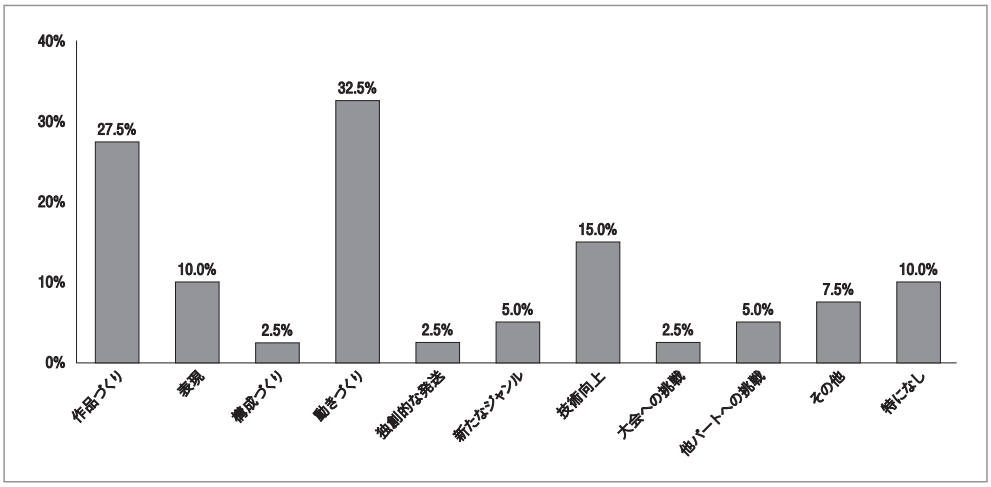

図2－1：部活動において挑戦したいこと

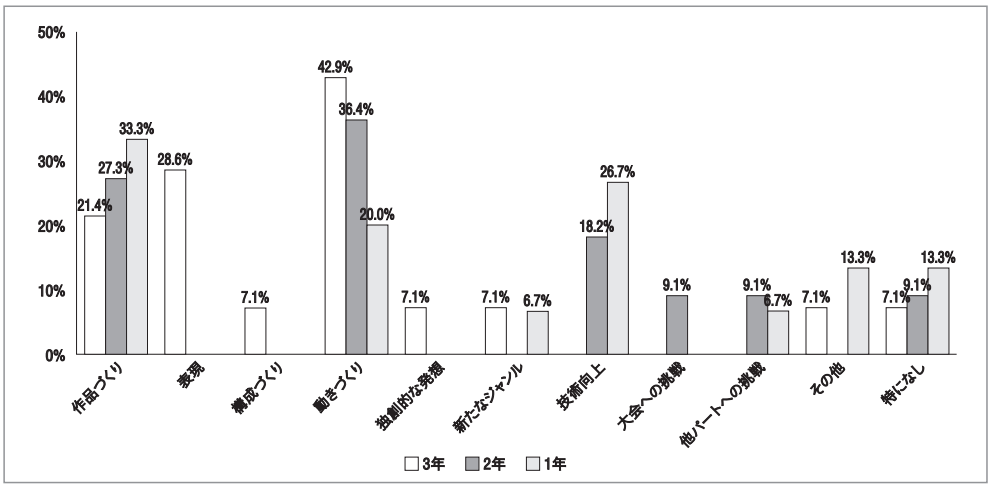

図2－2：部活動において挑戦したいこと（学年別）

なった。「1作品づくり」、「2表現」、「3構成づくり」、「4動きづくり」、「5独創的な発想」、「6新たなジャンル」、「7技術向上」、「8大会への挑戦」、「9他パートへの挑戦」、「10その他」、「11特になし」の11項目に分類し、学年とのクロス集計をおこなった。その結果、全体では、「4」13名（32.5）、「1」11名（27.5%）、「7」6名（15.0）の順に多くの回答を得た。χ^2検定の結果、有意差はみられなかった。

具体的な記述内容は、「1」では「印象的な振付の作品を作りたい」、「多面的に物事を捉えて作品を創作したい」等であった。「4」では「作品の意味やテーマを理解して、新たな動きづくりに挑戦したい」、「イメージを深め、動きを追及していきたい」等であった。「7」では、「技術を向上させ、作品作りにつなげたい」、「難しい技に挑戦したい」等であった。

3）教育現場での活用の可能性

①ダンス授業への活用の可能性と学年（表3－1）

W.D.がダンス授業に活用可能であるかという質問では、全体では、「1おおいに活かせる」32名（66.7%）、「2やや活かせる」16名（33.3%）、「あまり活かせな

い」、「全く活かせない」0名（0.0%）であった。χ^2検定の結果、有意差はみられなかった。

②活用可能箇所と学年（表3－2、図3）

W.D.の内容をダンス授業で活用する場合、どの部分が活用可能であるかという質問では、全体では、「1全てを活用できる」15名（31.3%）、「2部分的に活用できる」33名（68.8%）であった。

χ^2検定の結果、5%水準で有意差がみられたため、残差分析を行った結果、「1」は4年の調整済み残差値2.942と1%水準で有意に高かった。

「2」は4年の調整済み残差値－2.942と1%水準で有意に低かった。

また、「2」と回答した者が、具体的にどの部分を活用だと考えているかを調査した。項目は、①「ひと

表3－1：ダンス授業への活用の可能性（学年別）

		全体（n=48）	1年（n=15）	2年（n=13）	3年（n=14）	4年（n=6）	χ^2検定
		度数（%）					
現場での活用	おおいに活かせる	32（66.7）	9（60.0）	10（76.9）	7（50.0）	6（100.0）	n.s.
	やや活かせる	16（33.3）	6（40.0）	3（23.1）	7（50.0）	0（0.0）	p=0.1291
	あまり活かせない	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	
	全く活かせない	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	

表3－2：活用可能箇所（学年別）

		全体（n=48）	1年（n=15）	2年（n=13）	3年（n=14）	4年（n=6）	χ^2検定
		度数（%）					
現場での活用	全てを活用できる	15（31.3）	2（13.3）	4（30.8）	4（28.6）	5（83.3）**	p<0.05
	部分的に活用できる	33（68.8）	13（86.7）	9（69.2）	10（71.4）	1（16.7）**	

*残差分析にて調整済み残差　p<0.05,　**残差分析にて調整済み残差　p<0.01

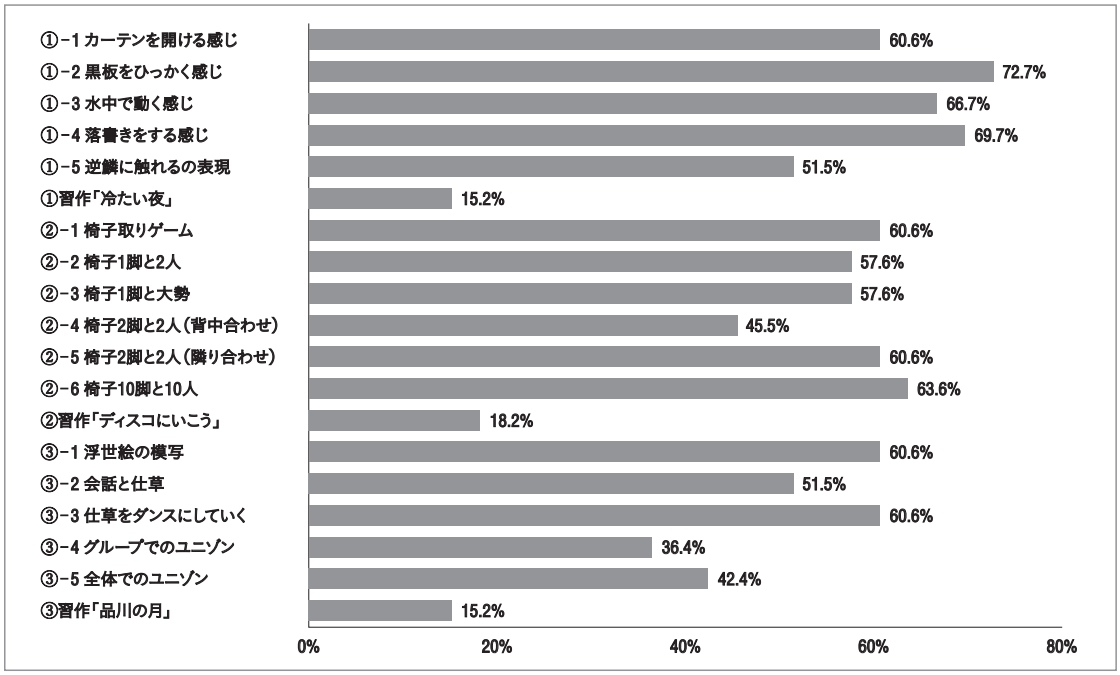

図3：教育現場で活用可能な箇所

流れの動き」を刺激とした取り組み6項目、②「物」を刺激とした取り組み7項目、③「日常の動き」を刺激とした取り組み6項目である。その結果、7割以上が活用可能だと答えた項目は、「①−2黒板をひっかくような感じ」24名（72.7%）であった。6割以上が活用可能だと答えた項目は、「①−4壁に落書きをするような感じ」23名（69.7%）、「①−3水中で動くような感じ」22名（66.7%）、「②−6十脚の椅子に十人」21名（63.6%）、「①−1カーテンを開けるような感じ」、「②−1椅子取りゲーム」、「②−5二脚の隣り合わせの椅子に二人」、「③−1浮世絵の模写」、「③−3仕草を大きくしてダンスにする」20名（60.6%）であった。5割以上が活用可能だと答えた項目は、「②−2一脚の椅子に二人」、「②−3一脚の椅子に大勢」19名（57.6%）、「①−5感情表現（逆鱗に触れる）」、「③−2会話と仕草」17名（51.5%）あった。その他の項目は、「①習作：冷たい夜」、「②習作：ディスコにいこう」、「③習作：品川の月」を除き、3〜4割が活用可能だと答えている。

③授業で活用する際の目標の設定と学年（表3−3）

W.D.の内容をダンス授業で活用する場合、授業の最終目標をどこに設定するのがふさわしいかという質問では、全体では、「1動きを生み出せる」9名（18.8%）、「2即興的に動ける」3名（6.3%）、「3動きを組み合わせて、感じを込めて動ける」3名（6.3%）、「4空間構成や音楽に合わせて動ける」11名（22.9%）、「5作品をまとめられる」3名（6.3%）、「6まとめた作品を発表できる」16名（33.3%）、「7その他」3名（6.3%）であった。χ^2検定の結果、有意差はみられなかった。

Ⅳ　考察

1. デモンストレーション化の試みとその成果

今回のデモンストレーション化の試みでは、「ひと流れの動き」「物を使うこと」「日常の動き」を起点とした3つの取り組みを紹介した。様々ある創作方法の一つとして、それぞれに異なる動きの生み出され方、動きの発展が提示できたのではないかと考える。ダンス部の指導をおこなう筆者らは、作品の創作には、「動きを深め、広げること」、「イメージを深め、広げること」、この両方が重要だと考え、日々、試行錯誤しながら指導にあたっている。今後、今回の試みで得た成果を生かした指導の充実が必要であることを感じた。

2. 「ワークショップ・デモンストレーション」への取り組みに対する評価

理解度は全体的に高い傾向がみられ（89.6%）、特に4年生は全員が「全体を通して理解していた」と回答していた。また、理解した時期は4年生は全員が「企画期」と回答しており、有意に高いといえる。1〜3年生は創作活動中期から後期にかけてほぼ全員が理解していた。発表会では最上級学年である4年生が中心に作品を作り上げることから、4年生の理解度が高いことは予想できたが、その他の学年においても理解度が高く、部員全員が内容を理解し、一

表3−3：ダンスの授業で活用する際の最終目標の設定（学年別）

		全体（n=48）	1年（n=15）	2年（n=13）	3年（n=14）	4年（n=6）	χ^2検定
		度数（%）					
目標設定	動きを生み出すことができる	9（18.8）	3（20.0）	3（23.1）	2（14.3）	1（16.7）	n.s.
	即興的に動くことができる	3（6.3）	0（0.0）	2（15.4）	1（7.1）	0（0.0）	p=0.5311
	動きを組み合わせて、感じを込めて動くことができる	3（6.3）	2（13.3）	1（7.7）	0（0.0）	0（0.0）	
	空間構成や音楽に合わせて動くことができる	11（22.9）	3（20.0）	3（23.1）	5（35.7）	0（0.0）	
	作品とまとめることができる	3（6.3）	1（6.7）	1（7.7）	1（7.1）	0（0.0）	
	まとめた作品を発表することができる	16（33.3）	5（33.3）	3（23.1）	3（21.4）	5（83.3）	
	その他	3（6.3）	1（6.7）	0（0.0）	2（14.3）	0（0.0）	

丸となって取り組んでいたことが伺える。

動き（振付）や構成への取り組みでは、学年が上がるにつれ、その関わりが強くなっていることが分かった。1～4年生が一緒に作品を創り上げる際は、上級生の方が多くの動きや構成のアイデアを出し、それをまとめる役割を担い、下級生はまとまったものを覚え、踊り手として関わったと考えられる。このことは、自由記述の苦労した点からも分かるように、4年生は内容をまとめること、3年生は動きづくりに苦労している割合が高いことからも伺える。また、1年生は他の学年に比べて、踊り方に苦労した割合が高いことから、動きを作ることよりも、与えられた動きを踊りこなすことに集中していたのではないかと考える。

今回の取り組みを通して、興味関心度が2.33点から2.75点に有意に向上していることから、学年により取り組み方は様々であるが、それぞれが意欲的に取り組んでいたことが伺える。自由記述においてもほとんどの部員が、ダンスを創作する上で、新たな発見や気付きがあったことから、今回の取り組みの成果があったのではないかと考える。しかし、1年生3名（20.0%）、3年生1名（7.1%）は新たな発見はなかったと回答していたため、その回答となった原因究明が必要であると考える。

3. 今後の部活動への影響

部員全員が今回の取り組みは今後の部活動における創作活動での活用が可能であると回答し（100%）、そのほとんどが部活動に対する意欲を高め、創作ダンスにより関心を示していた。また、新たに「作品づくり」、「動きづくり」に挑戦したい、技術を向上させたいといった具体的な意欲向上に結びつき、今回取り組んだ「創作過程」そのものを舞台上で提示するという部員にとって初めてとなる試みは、今後の部活動に好影響を与えられることが示唆された。

4. 教育現場での活用

部員全員が今回の取り組みは教育現場での活用が可能であると回答していた（100%）。また、授業展開をする際の最終目標も高いレベル（作品発表）に設定できると回答していたことから、今回の取り組みは、教員を目指す部員にとっては、指導法の一つを身につけるよい機会になったのではないかと考える。

Ⅴ　まとめ

今年度の「第52回ダンス研究発表会」では、本学ダンス部の日々の取り組みである「創作過程」そのものを舞台上で提示することを試みたが、普段、披露することのなかった創作過程を踏んで、作品が創り上げられるという過程そのものを提示するという一つの事例が示せたのではないかと考える。また、部員にとってもその成果があったのではないかと考える。特に部員の部活動や創作活動への意欲向上は、指導者である筆者らにとっては、嬉しい成果であった。部員の意欲を継続させるため、新たな取り組みに挑戦させたり、多くの刺激を与えたりと、部員の好奇心や創作意欲を掻き立てるような指導の充実が求められると考える。

また、本研究により、いくつかの課題も見つかった。一つは、部員の部活動や創作活動への意欲向上の要因を探ることである。部員の意欲向上が今回の取り組みによるものなのか、それとも単に新たな取り組みに挑戦したからなのかは定かではない。また、1～4年生が一緒に創作活動を行う機会も限られていることから、他学年との関わりによって得られた成果であるとも考えられるため、その要因を明らかにできればと考える。二つ目の課題は、下級生の取り組みに対する自己評価と創作活動における新たな発見の有無についてである。動き（振付）や構成への取り組みでは、学年が上がるにつれ、その関わりが強くなっていることが明らかとなった。特に1年生は、創作活動に関わるより、動きの習得、熟練に集中している割合が多くみられた。また、創作活動に対して新たな発見はなかったと回答する割合が多くみられたため、下級生の創作活動への関わり方や創作活動によって何らかの発見・収穫が見出せるような創作活動の在り方を探ることが必要であると考える。

今回のダンス創作過程のデモンストレーション化の取り組みや本研究を通して、その成果や課題が明らかとなったため、今後多くの事例を重ね、研究を継続していきたいと考える。

参考文献

1）舞踊文化と教育研究の会編（2008）：松本千代栄撰集3人間発達と舞踊創作，明治図書
2）リーン・アン・ブラム，L.タリン・チャプリン（2005）：舞踊創作の技法―舞踊の根源に触れる，新宿書房
3）文部科学省（2008）：中学校学習指導要領解説
4）文部科学省（2009）：高等学校学習指導要領解説
5）文部科学省（2011）：新学習指導要領 中学校保健体育【ダンス指導のためのリーフレット】
6）文部科学省（2013）：学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引，東洋館出版社
7）東京都教育委員会（2011）：武道・ダンス・体育理論 指導事例集，まこと印刷
8）全国ダンス・表現運動授業研究会編（2013）：明日からトライ！ダンスの授業，大修館